多発性骨髄腫の検査について

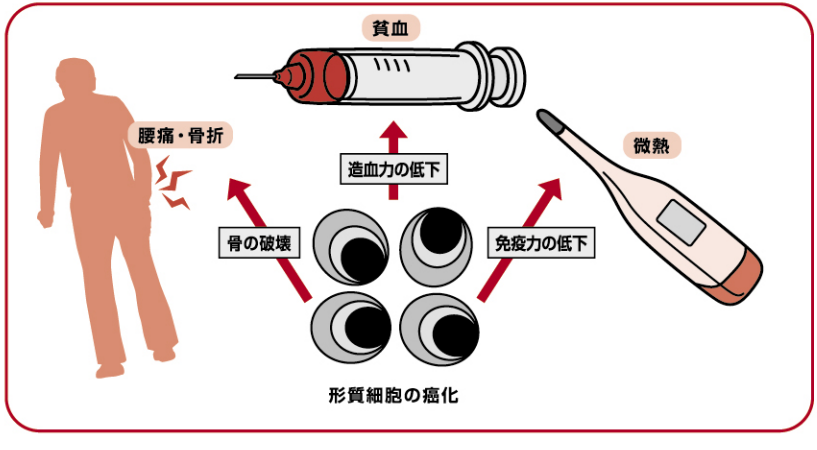
日本臨床検査専門医会
海渡 健

■多発性骨髄腫とはどのような病気ですか？

人には外敵から身を守る免疫という働きがあります。免疫はリンパ球が直接関係する細胞性免疫と免疫グロブリンという蛋白質が関係する液性免疫に分けられ、免疫グロブリン(Ig)にはIgG、IgA、IgM、IgD、IgEの５種類があります。感染症が起こった場合など必要に応じて形質細胞という細胞が免疫グロブリンを造っていますが、この形質細胞が腫瘍（癌）になり、必要もないのに大量生産することで全身に影響を与える病気が多発性骨髄腫（骨髄腫）です。この蛋白質は量こそありますが働きは不充分で、免疫力は低下してしまいます。決して稀ではなく、中年から高齢を中心にだんだんと増えている、全身のいろいろな症状を引き起こす病気です。

■どのような症状がきっかけで発見されますか？

自覚症状として大切なのは骨の痛みと貧血です。健康診断で貧血、血液蛋白質の異常、蛋白尿や腎機能障害などから発見されることもあります。形質細胞は血が造られる骨髄で増えるため、本来そこで造られるべき白血球、赤血球、血小板などが造れなくなり感染（熱）や貧血がおこり、また、形質細胞は骨をこわす破骨細胞という細胞を元気にするため、骨が溶けて、大した力が加わっていないのに骨折したり、溶けたカルシウムが血液中で増えてしまったりします。カルシウムは必要なものですが、多すぎると喉の渇きやイライラ感あるいは意識障害など大変な症状を引き起こします。骨粗鬆症と間違えられることがありますので、腰痛と同時に貧血を認めるときは精密検査をお勧めします。また、蛋白質がネバネバしているため、血の流れが悪くなり血液が腎臓でつまってしまい、その働きが悪くなることも重要な合併症となります。



■どのような方法で治療するのでしょうか？

進行はそれほど早いものではないため、全例とも診断がついたから即治療というわけではありません。貧血、骨の程度、カルシウムの濃度、腎臓の働きなどで進行程度を判断して、治療方針が決まります。早期のものは定期検査ですませることもありますが、進行してくると抗癌剤による化学療法、あるいは最近は65歳以下の患者さんには状況が許せば自家造血幹細胞移植が行われています。骨の痛みや骨折の予防や治療も大切で、骨の破壊を抑える注射や副作用の少ない鎮痛薬も使われ、また最近では以前に副作用が問題となったサリドマイドが有効であることも判明し、骨髄腫の治療薬として使用されています。長い病気なので、痛みを我慢することなく、気長につきあうことが必要です。